

◎あけましておめでとうございます。正月早々の一日、安威川河川敷に来ております。ぽかぽか陽気、温かいわけではないが陽が照り、ほどほどの冷たさで気持ちがいい。この何日か西からの風が吹いているので、往路を走る時は向かい風、歩くようなスピードだけど風に向かって走っている。寒いと感じる日は毛糸の帽子の上に、ジャンパーのフードを被り紐で結んでいる。そういえば今日初めてフードを被らずに走れた、そういう陽気の日だったのである。カラスが飛び回っている、今日はまだほかの鳥を見ていない。カラスが土手の上、中洲のあたり、スピードを出して飛んでおります。

しばらく走ってやっと白いサギが上空を横切り、またしばらくして、え、あれはハトかな、これもまたスピードを出して川を横切る。今日も風がきつい、強い風が吹く時は鳥君たち、ハイスピードで飛ぶのかな、どうかな。川面、流れの水面が陽の光に照り帰って綺羅キラキラ、スキの白い綿毛もほわりキラリだ。

◎先程ラジオのニュースで、ロシアがウクライナの都市のあっちゃこっちゃんにミサイルを撃ち込んでいるらしい。ロシアもウクライナも一昔前は同じ国だった、それが何かの理由で分裂して別の国になった。考えりゃ、親せきの家を攻撃しているようなものか、その関係性を知らないものには不思議な戦争かもしれないが、当事国同士には言ってもいっても言い尽くせないしがらみがあって、解きほぐせない糸が絡んでいて、当事者同士も、まして他人ならなおさらわけのわからない混沌があるのだろう。

今も世界のどこかで戦争とまではいわない紛争がいくつもあることはニュースで常に流れている。オレはこういう争いは、「宗教・力・金」でおこるものだと思っていたが、領土・資産と、政治信条と、文化・民族・差別とがあるという。今はニュース解説で、民主主義と専制主義なんて言葉が踊っている。専制君主的なやつがいて、「国民よ オレのことを聞け オレを信じろ オレを信じていたら幸せになる」こういうように単純明快に物事が進めば、専制君主が方向を誤らない限りうまくゆく、まるく収まる、解決や決断が早い、といいことづくめだ。そのテン、民主主義は、あっちの意見こっちの意見が右往左往する。選挙で選んでくれ、選んでくれるならお前の言うことを聞く、選挙に勝つためなら何でも差し上げる、こんなみっともないことがたくさん出てきて暴露されて、こんなことを聞かされると、がっくりするねえ。

戦争や紛争で、まず兵士が死ぬ。街が破壊され住民が被害を受ける。女性が敵の子を産まされる。子どもが敵に育てられ兵士や奴隷にされる。以前なにかで知ったが、アジアでは日本人とチベット人だけが、征服者の血が入っていない、遺伝子解析でわかったとか、征服されたことがない人種だって。戦争で攻め込まれると、何もかもがめちゃくちゃにされてしまうということやねえ。

知らなかったが、隣の朝鮮半島は、北と南、いまだに戦争状態なんだって、今は、ちょっと休戦している状態なんだって、戦争が終わったわけではないらしい、いつ開戦しておかしくないらしい。

ロシアも、ウクライナの国土をどんどん破壊しているが、これはロシアに弁償義務があるやろね。

いずれにしても、あいつらをやっつけないと我らの幸せはない、やっつけてしまえ 徹底的に攻め滅ぼしてしまえ、こんな理由で攻める法も攻められる方もたまったものではないが、これが歴史の続きなんだね。

◎安威川と大正川の合流地点で折り返して帰るのだが、今日はもう少し大正川を遡ってみようかと流れを見ながら走っている。あれれ、なんだか水が押し流されているような動き、風による波でそう見えるのか、潮の干満で大阪湾の水が押ししているのか、水が川上に流れているように見える。以前にもこの合流地点で川面を見ていたが、徐々に水嵩が増してきて、乾いていたコンクリートの護岸や敷いてある塊が水に浸かっていった。調べるとこのあたりは標高6~7メートルらしい。潮の干満差は1メートルぐらいらしい。大阪湾の1メートルの水嵩がこんな遠くまで水を押し流してくるとは思えないが、と不思議に思って水面を見詰めるオレであります。このあたりは水鳥が多い、いつも群がっている、ほとんどがカモかオオバンだ。カモは幾種類かがいるらしいが、その種類の区別はわからない、みな同じに見える。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎イザホワケの大君を継いで大君になったのは、ソバカリにスミノエノナカツミコを殺させたミヅハワケじゃった。先生独白：父から御子へでのうて、兄から弟へと大君の位が譲られるのじゃが、これは今までにないことでの、叔父から甥へのつなぎはあったがのう。オホサザキに続く御世というのはこういう御世だったのじゃ。

◎ミヅハワケ（第十八代反正天皇）は、多治比の柴垣の宮（現：松原市なのか羽曳野市なのか？）で天の下を治めたもうた。この大君は背が高うての、その身の丈は、九尺二寸と半ば（3メートル近い巨体）もあったのじゃ。またその歯の長さは一寸（ひとき：3センチ）、広さが二分（ふたきだ）もあっての、上の歯も下の歯も白くそろっておって、まるで石の玉を緒に貫いたさまじゃった。歯が美しく、人間離れた巨体・・・。

この大君の御世の伝えは何も語られていなくての、わずかな間だけ大君の位にあった方ではなかろうかのう。お年は六十歳（むそとせ）での、丁丑（ひのとこのうし）の年七月（ふみづき）に亡くなったと伝えておるの。御陵（みはか）は、毛受野（もずの）にあるのじゃ。

◎ミヅハワケを継いで大君になったのは、またしてもその弟のヲアサツマワクゴノスクネでの、この大君は、遠つ飛鳥の宮にいまして、天の下を治めたもうた。この大君の御子は九柱で 御子のアナホが大君のあとを継ぎ、次に御子のオホハツセが後を継いだ。

御子の中の、カルノオホイラツメのまたの名、ソトホシノイラツメという名は、その身の光が衣を通して照り輝いて外にもれ出るほどでの、それで名づけられたのじゃ。それはそれは美しい方であった。この話はあとで。原文に「衣通郎女」肉体の美しさが衣を通すほどの魅惑的な女性であった。衣を通す美しさとは、白い衣をつけた巫女が褌をして水に濡れ、その衣を通して浮かび上がった肢体のエロチシズムのイメージ。「衣通」という名は、エロチックなイメージを抱く名前。

◎ヲアサツマワクゴノスクネ（第十九代允恭天皇）が大君に就く時のことじゃ、まわりの者たちに大君に就くことを勧められたワクゴノスクネは、拒み続けた。

「われには ひとつの長い病があり・・・」

ところが、大后をはじめ、前の御世に高い位にあった諸卿（まえつきみ）たちが強く推すので、拒みきれずに大君の位を継いで天の下を治めたのじゃ。

この時、新羅の国王が、八十あまり一船（ひとふね）にも積んだ貢物を送ってきたのじゃ。そしてその使いとして遣わされたのが、コムハチニカニキムという者で、この男は薬の道を深く知っておったのじゃ。それでの、大君の病をすっかり治してしもうたのじゃった。

◎長い病から癒えた大君は、天の下のすべての氏々の者たちが伝えておった氏や姓の名を調べての、違い誤っておるのを憂え、神を祀るために味白禱（あまかし：飛鳥にある丘の名：甘櫨丘の丘：神を迎えて祈る場所）の言八十禍津日（ことやそまがつひ：偽りの言葉が禍々：まがまがしい状態）の前に出かけての、そこに、盟神探湯（くかたち：神に祈って熱湯の中に手を入れる：一種のウケヒ：本当にやけどをするので、何かの策略があったのでは：本当は熱くないとか・・・）をするためのおおきな釜、クカヘというのじゃが、それを据えての、天の下のすべての氏の者たちを集めて、煮えたぎる湯に手を入れさせて、ウソ偽りが無いことを神に誓いながら、人々の氏や姓を正しく定めたもうたのじゃ。

◎ヲアサツマワクゴノスクネの大君の御年は七十あまり八歳（ななそとせあまりやとせ）での、甲午（きのえうま：西暦454年：在位17年）の年の正月（むつき）の十日あまり五日に亡くなったと伝えておるの。その御陵は、河内の恵賀の長枝にあるのじゃ。以降皇子たちの争いへと展開する。

◎本日はアトリエ教室の初日、二週間ぶりに皆様にお会いできると思っていたが、たった三人のうちのお二人が都合が悪いと言ってこられたので、「あちゃ～ それじゃ 休みましょう」「ならば ポンポン山でも」晴れで午後から曇りの天気予報を見て、昨晚のうちに弁当を作った。上でゆっくりしたいなと早起きを期待したが、目覚めたのは7時、7時半に自転車で出発、摂津峡下の口に着いたのが8時半だった。我が家からここまで、なだらかの勾配、なだらかとはいえ自転車はシンドイ。まわりに自転車乗りが何人もいて、「山を登るのが 快感」「峠を越えて 他府県に向かうのが いい」彼らの気持ちがわからんね。ほんとうは上ノ口まで行きたいが、あの勾配はオレには無理なので下の口にいる。

◎10時に原村の墓のそばにある登山口にやって来た。下の口からここまで1時間半の歩きは長いね。それより今日は、前回のトンネルをじっくり見たかったが、トンネルは遠すぎてはっきり見えない。よくまあよじ登れたと思うフェンスもただのフェンス、トンネルの中も見ることができない。「これでは ないないづくしだ」

◎歩き出してすぐに。腰に着けたウエストポーチがずりりと滑った、「え あれれ」なんとベルトが烈断した。魚釣りサイトで買ったもの、大きさ、荷の入る具合が気に入っていたが、山用品と違い、頑丈さという意味でちょっと頼りない、たった3年ぐらいで、メインのベルトがプツリと切れる、お粗末だねえ。でもまた探すのが面倒なので同じタイプのもを早速注文しなくては・・・というわけで、今日は特別、臨時でカメラを肩に斜めがけにして歩いた。カメラ、水筒・・・などがすぐに取り出せる、山を歩く時にはなかなか便利な優れものと自賛している。次の山にも持って行きたいので、今注文した、色は黒で、2280円也、明日には届くという。

◎歩いていると前方に鹿の群れ、10頭ぐらい居たかな、オレに気づいて慌て左右に散った、尻の白い毛がよく目につく。いつもはポシェットに付いた鈴がシャカシャカ鳴るので、獣たちを見なかったんだとわかった。ベルトの切れたポシェットはザックの中に納まっている。

◎11:10 本山寺参道に登ってきた、よっこいしょ。あれれ、ICレコーダーの調子が悪いなと覗き見ると、電池が切れている。座ってザックを開け、美味しいポンカンを取り出し皮をむいてガブリ齧りつく、口いっぱい甘いジュースが流れ込む。ポシェットの中から電池の予備を探し装填した。IC君これで機嫌よく半年ぐらいは使用できる。さあ、てっぺんは12時半になるかな、そこで飯にしよう、もっとも登山口の前に高速道路側道で、特性サンドイッチをほおばったおかげで、まだ腹には余裕がある。

◎12:20 てっぺんにやって来た。先ほどから白いものがパラパラ、雪ではない、枝に残っている雪が舞っているのか、冷たい風が吹く。温度計はプラス6度を指している、雲がで始め、6.7割がた白い雲が広がり始めた。ここは、このあたりの人気スポットの山、休日でもないのに10人ぐらいの人がいた。弁当を広げて食べ始めた。前回同様にケルンが積まれた横のベンチ、「国地院」と彫られた三角点がある。弁当は昨夜、玄米ごはんに残り少ない梅干しを入れ、胡麻を振りかけた。おかずは野菜とベーコンを炒めた。雪の高見山でも、ここでも、冷えたごはんの弁当はぼそぼそ喰いづらい。ラーメンを炊いたり、温かい味噌汁を飲んだりの人が多い。魔法瓶に入った湯が美味い、一口二口飲んだ。かつて冬山で澤山さんが、「テルモスが必需品だよ」「湯のありがたみが わからないのは 厳寒を知らないからだ」なんて言っていた、「これぐらいの寒さ 水で充分だ」なんて心の中で呟いていた。ジジイになった今、冬の山は暖かい湯、火が恋しいねえ。

◎てっぺんを1時前に出発、ちょうど1時間で参道の合流地点に下りてきた。ゆで卵を喰い、スポーツ飲料をごくごく飲んだ。歩き始めて何時間も経って、やっと喉が渴いてきた、水の消費量は少ない。大きな水っぽいポンカンが2個持ってきた、これは美味い、水分補給にもなる。空の雲が多くなってきた、陽が雲に隠れるようになってきたがまだまだ曇った日の薄暗さではない。

◎今日は本山寺には寄らなかったが、復路は神嶺山寺の前を通って帰っている。斜面に重機が入って台風の倒木を片付けている。神嶺山寺に近づくと太鼓の音がする、神嶺山寺も本山寺も、修験道の寺でもあるようで、修験者が護摩を焚いて太鼓の音を出しているのかな。朱・黄・緑・紫・白の垂れ幕がお堂にかかっている。

◎4時頃下の口に着き、ビスケットと水を飲んだ。自転車で乗り、5時に自宅に帰り着いた。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎ヲアサツマワクゴノスクネの大君が亡くなってすぐのことじゃ、大君の位を継ぐはずのキナシノカルは、同じ腹に生まれた妹のカルノオホイラツメに心を奪われてしもうての、いつの頃からか道ならぬ間柄になってしもうたのじゃた。

◎カルノオホイラツメのまたの名、ソトホシノイラツメという名は、その身の光が衣を通して照り輝いて外にもれ出るほどでの、それで名づけられたのじゃ。それはそれは美しい方であった。皆はソトホシと呼んでおった。兄と妹との伝え：イザナキ・イザナミ。サホビコ・サホビメ。続いて三組目である。

◎キナシノカルは思いを寄せる妹に歌った。

あしひきの やまだを作り	足を引きずる 山の田を作り
やまだかみ したびをわしせ	山が高いので 水を引く下樋（したび）を通す
したどひに わがとふいもを	その下に隠れて声をかけ わが想いを寄せる妹よ
した泣きに わが泣くつまを	その下に隠れて泣く わが慕い泣く妻よ
こそこそは やすくはだふれ	今宵こそは たやすく肌に触れたよ

◎続けてもう一つ歌った。

ささばに うつやあられの	笹の葉に 打ちつける霰はたしだしと
たしだしに い寝てむのちは	たしかにしかと 寝たのちは
ひとはかゆとも	たとえ人など離れても
うるはしと さ寝しさ寝てば	うるわしいとて 共寝したならば
かりこもの みだればみだれ	世は狩り菘に似て 乱れるなら乱れてしまえ
さ寝しさ寝てば	ともに相寝て過ごせるならば

◎さあ、この歌がもとで、ふたりの仲が人々に知られてしもうたので、御門に仕える者たちも、天の下の人たちも、みな、日継ぎの御子であったキナシノカルから離れて、弟のアナホに寄り付いてしもうたのじゃ。それで、キナシノカルは日継ぎの御子という立場を保つことができなくなった。しかも大臣の家に逃げ込むことは、反逆者：謀反人に位置に身を置くことになる。

◎大君の御子たちの力は、臣下（豪族）たちのバックアップを取り付けられるか否かによる。スキャンダルによって、キナシノカルは日継ぎの御子という立場を保つことができなくなった。しかも大臣の家に逃げ込むことは、反逆者：謀反人に位置に身を置くことになる。

◎そして、アナホは、軍（いくさ）を興して、オホマエヲマヘノスクネの家を取り囲んで、歌った。

おほまえ をまへすくねが	オホマヘ ヲマヘノスクネの家の
かなとかげ かくよりこね	大きな門の下へ さあ寄っておいでよ
雨たちやむ	雨をやり過ごそうよ

◎これはアナホの企みでの、すぐには攻めずに、大臣のスクネを呼び出し話し合いをしようという誘いじゃた。すると、その歌を聞いたオホマエヲマヘノスクネは手を上げ下げしての、おのれの膝を打ち、笛の音に合わせ舞いながら、歌をうとうてアナホの前に出てきたのじゃ。

みやひとの あゆひのこすず	宮仕えの方々の 足に結んだ小さな鈴が
落ちにきと みやひととよむ	落ちてしまったと 宮人たちは大騒ぎ
さとびともゆめ	里人たちも心を引き締められよ

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎歌をうたいながら出てきたオホマヘヲマヘノスクネは、アナホの前に出ると、こいいうたのじゃ。

◎「わが ヲアサツマワクゴノスクネの大君の御子よ 同じ腹に生まれた兄の御子に 兵を向けるのはおやめくだされ もし 兵を向けなされば 多くの人々があなた様の振る舞いを笑い諷ることでありましょう わたしめが 兄の御子を捕らえてお連れ申しましょう」

◎オホマヘヲマヘノスクネは、家の中に戻ると、カルの日継ぎの御子を捕らえて、アナホに差し出した。

◎先生：どうい話し合いなのか、頼って来た御子と共に滅びる臣下もいれば、御子を差し出す臣下もいる。

◎捕らえられたキナシノカルが歌った。歌ふたつ。

あまだむ かるのをとめ	天翔ける雁の そのカルノヲトメよ
いた泣かば ひと知りぬべし	ひどく泣くと 人が知ってしまおうぞ
はさの山の はとの	波佐の山に棲む 鳩に似て
しき泣きに泣く	低く心の中で泣く

あまだむ かるをとめ	天翔(か)ける雁の そのカルヲトメよ
したたにも より寝てとほれ	しっかりと やれに寄り寝ていきなされ
かるをとめども	カルヲトメたちよ

◎さて、捕らえられたカルの日継ぎの御子は、伊予に流されることになったのじゃ。

◎先生：同じ腹から生まれた兄と妹との姪(たわけ)は重い罪じゃ。流刑の地は罪の軽重によって、遠近の差があった。遠流の地は、伊豆・常陸・佐渡などがあり、中流の地としては、信濃・伊予などがある。

◎キナシノカルが、いよいよ流されるときに、ふたつ歌った。

あまとぶ とりもつかひそ	空を翔(か)けめぐる 鳥は使いよ
たづがねの 聞こえむときは	飛ぶ鶴の声が 聞こえるときには
わが名とはさね	わが名を尋ねてくだされよ

おほきみを 鳥にはぶらば	大君であるこのわれを 鳥に放りだしたなら
ふなあまり いがへりこむぞ	船は余っておろうゆえ すぐに帰ってこようもの
わがたたみゆめ	われの畳を守るのだ
ことをこそ たたみといはめ	ことばでは 畳と言っておくけれど
わがつまはゆめ	まことわが妻 身を守り待て

◎ソトホシ(カルノオホイラツメのまたの名、ソトホシノイラツメ)が流される御子に贈った歌。

なつくさの あひねのはまの	夏草の繁る 共に寝る阿比泥(あいね)の浜の
かきかひに 足ふますな	貝の欠けらで 足など踏みぬきなされるな
あかしてとほれ	どうぞ朝までそばにいて

◎ソトホシは流されたキナシノカルのとを追いかけて伊予へ向かった。歌った。

きみがゆき けながくなりぬ	あなたのお出まし 長く日は過ぎぬ
やまたづの むかへをゆかむ	ヤマタヅ(ニワトコ)のごと 山を尋ねてお迎えに
待つには待たじ	とても待つてなどいられませぬ

- ◎今日は昼から雨模様という予報が出ていた。朝のうちに2時間ほど絵を描いたあと、安威川河原にやって来た。この5年、朝5時や6時に起きるのが苦痛ではない。若いころは、夜に、何やかやごそごそして、朝の9時10時に起きるのが常だった。ジジイになったのか夜の10時11時になってくると眠くなる、普通の人になってきたかなと嬉しくもあり、淋しくもありである。安威川には、午前中にやってくることは年に2.3度しかない、という珍しい河原風景である、どこが違うかと言えばいつもと同じだが・・・。そういえばおっさんの団体、オレよりちょっと若いかな、4.5人連れてって歩いている人、この人たちは前にも何回か見ている。中年のペアの二人、この人は先日夕方に見ている。空はボウ〜ッと影ができるぐらいの日差したが、白濁模様だ。あと何時間かすれば降り出し、明日も降るとか。今日は暖かいが、雨になればまたまた寒くなるとか。
- ◎友人が旅に出て、その様子を逐一ラインで知らせてきている、日に3.4度スマホの連絡音がある。「今 ○○にいる 雪がきれいだ ○○を喰っている・・・」どこを移動して、どこで止まって、どこで寝て、何をして、また次の地点へ、写真も動画も来る、気の向くままの旅ガラスだ。それを見ていて、もう四半世紀前、「ふらふらペインティングの旅北海道」に出かける時に、同じようなことをしたいと画策した。オレが初めて訪れる北海道の景色を、現場の空気を、感激の情景を皆さんに伝えたい、オレ自身が文章を書き、絵や風景をカメラに納め、それらをその都度配信して見てもらう、そういうことがしたいと考えた、そういうことを夢想していた。デジタルカメラにノートパソコン・・・などを用意したが、当時のオレの技術や機材や知識では到底無理な話だった。車中泊の旅では充電もできない、パソコンのIT機能が使えない、通信値段が1分で○○円という時代、しかも公衆電話しか手段がない。物知りの人が聞けば、「これはこうすればよかったんだよ」となるかも知れないが、まったくお手上げだった。そんな夢に見たような作業が、スマホひとつで簡単にできる世の中になったと感心している。ただ最近のSNSの情報、いかにバエした画像でも、爆笑する動画でも、これらは喰い足りない、こんなものじゃアカンと思っている。大きな画面、流れる音楽、構成された画像、もっといい文章、そんなこんなが欲しい、とはこれもジジイのセリフかな。今は、オレ自身、旅から帰って、文章や画像を整理して我がホームページに載せることで満足している、観客が居ようが居まいが意識しない。
- ◎スマホでの速報は事件や事故の情報が出回っている。過激な事件や事故をたまたま遭遇した人の画像と音声はTVニュースでYouTubeでよく見られるが、タイムリーな衝撃場面はそれなりにすごい。それこそ戦争まっただ中の最前線の兵士にカメラを装着してもらい、実況中継してもらおうということも出てくるかも。
- ◎危険な山を登りながらの実況中継の最中に、命を落とした輩がいる。WEBで調べてみるとお目当ての登山家は見つからなかったが、富士山で10月末に滑落死した方の話がいくつか見える。オレが登ったのは11月下旬の連休だったと記憶している。その時は、五合目まで車で登り、オレひとりテント泊。明朝5人の仲間と登り始めた。登山者がたくさんいたような記憶がある。「え こんな軽装の奴まで いるな・・・」と驚いたのはスニーカーを履いた若者たちがいた。我々はザックの中にアイゼンや防寒具や食料を入れ、ピッケルを刺して重厚な登山靴で登っていた。早朝に出発し車まで帰ってくる山行だった。その時期の富士山は、上の方の小屋はみな閉まっている。上に行くほどに雪が増し、さらに上に行くほどに雪が凍りだした。アイゼンをつけピッケルを突き刺して慎重に歩いた。八合目あたりまで来ると登山道がキラキラ光りだし、八合目半ぐらいの場所で、ここから上は危険だと帰ることにした。澤山さんはもう少し上まで行ったようだが、彼を待ってられない、寒くなってくる、ますます地面が凍ってきた。危険な箇所は慎重にゆっくり下った。車まで帰り着いて待っていると、澤山さんも降りてきた。「スニーカーの若者がいて 歩けないんだよ 引っ張って帰って来た 無茶なやつがいる」「横で ひとり滑落した いやなものを見た」その日は急に寒くなり、富士山で5人が滑落、1名死亡、4名重軽症だったらしい。我々が帰るころに、険しい顔をした捜索隊が上の方に向かっていたが、すぐに暗くなる時間なので余程ラッキーな人が捜索隊に助けられたんじゃないのかな。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎ソトホシは流されたキナシノカルのを追いかけて伊予へ向かった。

◎そこで、いとしい妹のソトホシが追ってくるのを知ったキナシノカルは、妹を待ち焦がれて、二つ歌った。

こもりくの	はつせの山の	山に籠る	泊瀬（はつせ）の山の
おほをには	はたはりだて	その高い嶺には	長い幡を張り立て
さををには	はたはりだて	小さな嶺にも	幡を張り立てる
おほをにし	なかさだめる	大きいのと小さいのとの間の	その仲を契り
おもひづま	あはれ	心を掛けたいとしの妻よ	ああ
つくゆみの	こやるこやりも	伏せ置いた槻の木の弓の	寝ている時も
あづさゆみ	たてりだてりも	立て掛けた梓の弓の	起きている時も
のちも	取りみる	いついつまでも	変わらずに見続けていたい
おもひづま	あはれ	心掛けたいとしの妻よ	ああ

こもりくの	はつせのかはの	谷に籠められた	泊瀬（はつせ）の河の
かみつ瀬に	いくひを打ち	流れの上には	忌み杵（くい）打ち立て
しもつ瀬に	まくひを打ち	流れの下にも	真杵（くい）を打ち立て
いくひには	かがみをかけ	忌み杵（くい）には	鏡を掛け吊り
まくひには	またまをかけ	真杵（くい）には	大きな玉を掛け吊り
またまなす	あがもふいも	大きな玉のごとくに	思い続けるいとしい妹よ
かがみなす	あがもふつま	鏡のごとくに	思い続けるいとしい妻よ
ありと言はばこそ	に	お前が待っていると	言うからこそ
いへにもゆかめ		家にも行きたいと思うのよ	
くにをもしのはめ		郷を懐かしくおもうのよ	それが今はもう

◎こう歌うと、伊予に流されたキナシノカルと、御子を追ってきた妹のソトホシとは、逢うた喜びにひたりながら、そのまま共にみずからの命を断ってしもうたのじゃった。

◎さて、哀しい終わりを迎えはしたが、揉め事も片付いたので、御子のアナホが、ヲアサツマワクゴノスクネの後を継いで大君になったのじゃ。

御子のアナホはの、石上の穴穂の宮に坐して、天の下を治めたもうた。御子は一人も伝えられておらぬのじゃ。

◎先生：古事記の各巻で、兄妹婚を指摘できる。

上巻では、イザナキとイザナミが兄と妹で語られる。中巻では、サホビコとサホビメの伝承があり、下巻では、キナシノカルとカルノオホイラツメ（ソトホシ）の伝承が兄妹の悲劇を語る。いずれも、タブーとしての同母兄妹の関係を軸に物語は展開する。

イザナキとイザナミの場合は、ヒルコが誕生したり、やり直しをしたりするところに兄妹のタブー性が表れている。始原の世界を創造する兄妹として肯定的に描かれる。

サホビコとサホビメの場合は、同母兄妹の伝承を人の世の歴史として語るために、タブー侵犯の意識を強めてゆかざるを得ない。それゆえ結末は二人の死となり、天皇とサホビメとの間に生まれたホムチワケは、母の罪を背負った、もの言わぬ子として誕生する。

- ◎一週間前ぐらいから、「どこの山に 行こうか・・・」と思案していたが、「雪の明神平 青空 樹々 へばりついた雪」そんなものが見たいと思い始めた。相澤・前川・三宅の方々と一緒に、「足が心配・・・」という声が聞こえているが・・・。檜塚奥峰まで行きたいが、明神平までの計画にした。
- ◎7時に家を出発。阪急茨木駅付近で二人を乗せ、近畿道→西名阪：柏原→橿原→道の駅宇陀路大宇陀で一名合流→東吉野村役場→大又川終点の駐車場。7時に家を出発だと道がやや混む時間、30分前に出ると空いている。たった30分の違いだが、早起きがまだまだできないね。
- ◎明神平のスキー場は、昭和39年開業し、たった5年で閉鎖したらしい。今も残る林道終点から、スキー客は我々と同じように、1時間半ぐらい登山道を明神平まで登り、貸しスキーを借りて楽しんでいたようだ。今でも75分のコースタイムだ。登山道をエッチラ登ってスキー場まで行くのはたいへんだ。そんなスキー場を楽しみたいという客は少なかったようで廃業になったらしい。今は渡渉が4回あるが、当時は今より渡渉回数が少なかったかもしれないが、それでもここはオレにいわせりや登山道だ。
- ◎10:20 駐車場から出発。駐車場から登山口まで40分だった。横を流れる大又川はなかなかの水量でざわざわ音を立てている。多分この川は暴れ川なのか崖が崩れ、道路が冠水したりしている。以前も駐車場の相当手前で通行止めだったこともあったし、登山口までの道路も凸凹どころか、端のコンクリートしか歩けない位に大きくえぐられた箇所もある。かつて、スキー客用に整備された道路だろうけど、スキー場廃止から半世紀経った今でも、林業用、ついでに登山客用、ありがたい立派な道路だ。
- ◎12時前に滝までやって来た。4回の渡渉を経て上り坂、北向き斜面のこのあたり、5センチ10センチの雪が凍てつき、オットト、コラショ、登りはひっくり返らなかったが、下りは何度もすってんころりんだ。このあたりから上の方に峰が見え始め、「お 白い 樹々がまっしろ 空が青い すごい 期待通りの景色だ」ここで、大福饅頭をいただき、バナナをいただき食べた、美味しい。林道の道中で手造りサンドイッチもほおばった。雪の量は少ないが降って日が経った雪は堅く滑りやすい、ここで、6本爪のアイゼンをつけた。ピッケルも持っているので、つるつる道も助けられた。
- ◎エンヤコラどっこいしょ、水場が見えもうすぐてっぺんだ。天王寺高校の小屋のテラスで飯を喰った。前回の高見山は雪と風、扉の無い避難小屋の中は零下6度だった。今日は暖かい真っ白の雪、樹々の枝々に雪がへばりついている。コンロ・ボンベ・水を担いできたのでまずは湯を沸かし、弁当を広げ暖かいみそ汁を飲んだ。暖かい飲み物はいいねえ、これなら冷たいごはんも冷たいおかずも苦にならない、美味しい。次にポタージュ、次にコーヒー、美味しい。
- ◎2時半に下山開始として、ちょっと上まで散策。オレはここ、明神平あたりの景色が好きだ。最高の景色だ、元スキー場なので広々とした草原にぽつぽつと背の高い樹が立ち上がっている、白い石灰石が所々に散乱、白い雪白い石は目立たないが、そのぶん、青い空、雪で太くなった枝のさまはトナカイの角か、樹氷が付いてゆったりと時が流れる。次回はぜひ檜塚奥峰の方へも足を延ばしてみたい。夕方は5時ぐらいで暗くなりかけるが、あとひと月もすればもう少しゆったりと時間が使えるかな。
- ◎今日は下り道で、4.5回すってんころりん、氷を踏んでこけてしまった、尻もちもあり、するりとあお向けもあり、うす氷の斜面は油断ができない。渡渉があるのでアイゼンを外したとたんの4.5回でした。幸い骨の部分を打つことがない、「いてて おっとと」で笑って起き上がったが、前回の北小松では、下る途中に尻もちをついたが、尾骶骨に樹の根っこが当たり、鈍い鈍痛、いまだに河原でベンチに寝転んで上向きに足を上げるストレッチ、おおまだそこが痛いねと感じるほどに長らく痛みを残しています。
- ◎朝、来た時、休日でもないのに車が多いと驚くほどにたくさんの車が止まっていたが、我々の車しか残ってなかった。今日は茨木に帰って簡単に新年会をしようと決めている。汗で濡れたシャツを着替えさっぱりして運転席に座った。今回は榊井君子には寄らずにいこうと決めていたが、買えり道、彼の家が見えだすと、「ちょっと 顔だけでも・・・」声をかけてよかった。元気な彼の顔が見られた。

◎北野 50 周年記念誌に文章を書いてくれという依頼があった。「名もなく 貧しく 美しくもない オレが 大事な場面で 文章は 書けないよ」そう言って、いやだと断ったが、他の方々も、「いやだ いやだ」の連発を聞き、断り切れずにお鉢が回って来た。それじゃ画家の話でも書くか、そんなことを書くやつはいまいと思ったら、なんと吉原治良のコレクターがいて、美術館までやっておられるとか。ほんと、いろんな方がおられるもんだね。そんなこんなで佐伯祐三のことを調べてみた。

◎佐伯祐三は 1898 年：明治 31 年：現中津 2 丁目：光徳寺の子息。WEB で検索するとほとんど淀川土手の近所に光徳寺はあるが、想像したお寺の建物ではなく、学校法人があり、佐伯祐三生誕の地と書かれた石碑が立っている。何時の日か機会があれば見に行ってみよう。北野中学校、東京美術学校を出て、パリに二度行っている、延べ何年か過ごしたようだ。最後は持病の結核が悪化し、精神不安定から自殺未遂があり、精神病院に入院、看取られる人もなくひとりで逝った、しかも、たった 30 歳だ。

◎オレが在校時代、佐伯祐三の絵が校長室にあった。しかも代表作の一つとして彼の画集にも載っているという絵だ。「ノートルダム：マント・ラ・ジュリ」という題名なので、あの有名なノートルダム大聖堂だと思うが・・・、ほんま物の写真と比べるとやや形が違う、「ま 絵だから いいじゃないの あの 大聖堂で」

◎オレが在校時代、友人の猛者連が、校長室に連れて行かれ、停学処分を言い渡されたとぼやいていた。校長室とは誰もがそう簡単には入れる部屋じゃなく、処分、訓戒、宣告の部屋ぐらいのイメージのと思っていた。もっともそれらの猛者連の中には、持ち前の胆力で、社会的になかなかに出世したやつもいたね。オレは美術の岡島先生に連れられ、「岡村 見せたる どや これが佐伯の絵だ」「へええ これが あの有名な佐伯祐三の絵 なんだか薄暗い絵だな・・・」当時そう思ったが、今でも校長室に在ったあの絵の写真を見て、「重厚だけれど 薄暗い絵だ 好きになれない」という意見は変わらない。

◎あらためて、佐伯祐三の絵をネットで見ると、人物画が数点。パリの風景、雑然と並ぶ建物群や下町のポスターがやたらと貼られパリの壁、カフェの椅子と机、ひよろ長い人がこちらを見つめ浮かんでいる。オレが好きな絵は、パリの建物の一部や、ごみごみしたパリの壁、ポスターや落書きの壁、そんな美しくもない、豪華でもない、つまらない一瞬を、想うがままに筆を走らせ、絵の具を置いている、そんな絵が一番だね。郵便配達人もいい。この郵便配達人の絵のことで、佐伯の奥方が、絶賛している。「一度しか会ったことのない郵便配達夫を 瞬時に捉え 生き生き描いている」彼女も美術学校の同窓のようだ。

◎今まで、「よく知っている画家」と思っていたが、じっくり絵を見たことが無かったのは事実。今、WEB の絵をじっくり見てみると、やはりパリの汚い壁を描いた絵がいい。ノートルダムもいいにはいいが、こんな絵、どこにでもありそうじゃないのと思っている。パリの汚い壁も、彼が死んでから、たくさんの日本人が絵画の都、パリに行き、パリの風景を佐伯風に描いていたのを思い出す。エラそうなことを申しますが、佐伯の絵、そんなにすごい絵なのかね、なんて言ったら怒られそう。

◎佐伯より 7 年遅れて北野中学に来たのが吉原治良。あらためて、吉原治良の絵をネットで見ると、半世紀経った今でも、その新鮮さに目も眩む。その考え方、その描き方、そのもって行き方が、心に突き刺さってくる、ほんとうに素晴らしい。禅宗僧侶が描いたマルを大きな画面に描いている、白地に黒、黒地に白、赤や青を使ったバリエーション。かくも単純に何もかも削ぎ落とし、たったそれだけ、でも堂々としている絵だ、涎がこぼれる。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎御子のアナホが、ヲアサツマワクゴノスクネの後を継いで大君になったのじゃ。御子のアナホはの、石上の穴穂の宮に坐して、天の下を治めたもうた。御子は一人も伝えられておらぬのじゃ。

◎ある時のことじゃ。この大君は、同じ母が生んだオホハツセのために、坂本の臣らが祖（おや）ネノオミを、叔父のオホクサカの許に遣わしての、「あなたの妹のワカクサカを、わが弟のオホハツセの妻にしたいと思うが、どうか差し出してくださらぬか」と言わせた。すると、オホツカサは、四たびも頭を下げて拝みながら、「いずれ、こうした大君のお言葉があるのではないかと心待ちにしておりました。それで、外にも出さずねんごろに育ててきました。このお言葉は恐れ多い限りです。お言葉のままに差し上げましょう」と、とても喜んで答えたのじゃった。

そして、それだけではのうて、言葉だけを持たせて使いを大君に返すのは礼のないことかと思うての、返しの言葉に副えて、喜びの心を示す品じゃというて、宝の石を飾りに付けた黄金の木をいくつも立てた冠を持たせての、使いのネノオミを大君の許に返したのじゃった。

ところが、その喜びの品があまりに美しく貴い物だったので、使いのネノオミは、その宝の冠を盗み取ってしもうて、オホクサカをねじ曲げての、

「オホクサカの御子は、大君のお言葉を受け入れようともせず、おのれのいとしい妹を、われら族（うから）の下席（したむしろ）などにできようか」と仰せになり、太刀の柄を握り締めて、今にも斬りかかるという勢いでお怒りになりました。それで、わたくしは引き下がるしかございませんでした」と申し上げた。

◎先生：ひどい男もおったものじゃが、こんな嘘も見抜けぬ大君もどうかのう。オレ：どうもこのころは、一族というか同族というか天皇家は、節操のない時代だったのかな。とはいえこれは神話だから・・・。

◎それを真に受けた大君はひどく怒っての、スグサマオホクサカを殺し、その妻であったナガタノオホイラツメを奪い取ると、おのれの太后に据えてしもうたのじゃ。

◎先生：アナホの大君は叔父を殺し、その妻を奪い取って、自分の妻にした。その女性は、大君と母が同じ姉である。キナシノカルとソトホシとの兄妹の間が道にはずれていると、捕え島流しにしたアナホの大君が、真の姉を太后に据えるとは考えられないことだが、古事記はそう伝えている。

◎その後のことじゃが、大君は、神を迎え教えを請うために神牀（かんどこ：聖なる座）にいでましての、体を横たえて昼寝をしておったのじゃ。そうしての、そばに侍る太后に話しかけての、

「そなたはなにか悩みごとはあるか」と問うと、太后は、

「大君の心からの思いやりをいただき、悩みわずらうことなど何もございません」と答えるのじゃ。

◎この太后ナガタノオホイラツメには、先の夫のオホクサカとの間に生まれた子、マヨワ（目弱王：目が弱く耳がさどかつたのでは）がおっての、年は七歳（ななとせ）じゃった。その子が、大君と太后との語り合おうておった神牀のある高床の殿の、その床下に入り込んで遊んでおったのじゃ。

しかし、大君はその幼子（おさなこ）がおのれの座ます殿の下で遊んでおるとは思いもよらずにの、太后に語りかけた。

「われには、つねづね心にかかることがひとつあるのだ。それが何かといえば、そなたの子のマヨワだ。あの子が大きくなった時、父親を殺したのはわれだと知ったならば、おそらく邪な心を抱くにちがいないと・・・」床下で遊んでいたマヨワは、大君のその言葉を聞いて、自分の父親を殺したのが、今の父の大君だと知った。幼いマヨワは、大君の寝ている時をねらって、おのれの父を殺し、母を奪った男、その大君の太刀で、大君の首を打ち落とした。

◎アナホの大君の御年は、五十あまり六歳（いそとせあまりむとせ）だった。御陵は、菅原の伏見の岡にある。

◎久しぶりに今昔物語を借りてきた。古事記をじっくり読んでみると、じりじり（ケタイな表現だが）面白い。

これなら、今昔物語もじっくり読めば、前以上に面白いかもという、スケベ心である。

◎飛驒国猿神止生贄語第八：ひだのくのにの さるかみのいけにえを とどむること

◎今昔、仏ノ道ヲ行ヒ（おこない）行僧有（ありくそうあり）ケリ。何（いず）クトモ無行（なくおこない）ヒ行（ありき）ケル程ニ、飛驒国マデ行ニケリ。

而ル間、山深入リテ道ニ迷（まどひ）ニケレバ、可出ヅ方（いづべきかた）モ不思（おぼえざり）エケルニ、道ト思（おぼ）シクテ、木ノ葉ノ散積（ちりつもり）タリケルウエヲ分行（わけゆき）ケルニ、道ノ末モ無テ、大ナル滝ノ簾ヲ懸タル様ニ、…全文この調子で続いて行く。

◎今は昔、仏道修行をして歩く僧がおった。所定めず行脚しているうち、飛驒の国まで行った。

ところが、山深く入り込み、道に迷って人里に出られなくなり、道とおぼしき木の葉の散り積もった上を分け入っていると、いつしか道が途絶え、大きな滝が簾を掛けたように幅広く高所から落ちている所に行きあたった。引き返そうにも道がわからない。進もうにも、手を立てたような断崖が百丈も二百丈も聳えていて、よじ登る術もないので、ただ、仏様どうぞお助けくださいと念じていると、後ろの方で人の足音がした。

◎男が歩いてきた、僧は道を聞こうとしたが、男は答えもせず滝の中に躍りは入った。さては人間でなく鬼か、鬼に喰われる先に死のうと、僧は滝に飛び込んだ。なんとただの簾で、進むと村があり人家が在った。たくさんの人が集まって来て、「ぜひうちに来てくれ」それぞれに引っ張られたが、一軒の家に連れて行かれた。男女の使用人がたくさんいる屋敷、家じゅうのものが僧を大歓迎、「まずはお食事を」魚や鳥やらの大御馳走が出てくる。僧は、「かような 魚や鳥は 僧には・・」主人は、「いえいえ 召し上がってください」「私にひとり娘がいます 妻にしてやってください」「髪も 今から伸ばしてください」僧は逆らえば殺されるかもしれないと恐ろしく思うが逃げだす術もない。僧は主人と差し向かいで膳のものを食べてしまった。夜になると、主人が二十ほどの娘連れ、「妻にして かわいがって やって ください」連れてきたので、僧は甲斐なくも女と接してしまった。

◎男は（ここから僧は男に変わる）は夫婦としての月日が楽しくて仕方がない。着たいものを着せてくれる、食べたいものを食べさせてくれる。夫婦の愛情も深まり、ともに昼夜離れず八か月が過ぎた。ところが妻の顔色が悪くなりだした。主人は、「どんどん食べてください」という。ますます嘆き悲しむ妻を見て、男は、「なにがあるのですか？ 隠しだてせず 話してください」としつこく言う。妻は泣く泣く話し始めた。

「この国の 神様が 人を生贄として 食べるのです」「我が家は その生贄を探していたのです それがあるあなた様です」「あなた様がいなときは 私を 生贄に出さなければならぬのです」「痩せた生贄を差し出すと 神様が怒り 人は病み 不作になり 里も穏やかではありません」

◎男、「なんだ そういうことか 嘆くことはありません」「その神様の姿は・・？」「なに 猿・・？」妻に、「鉄の刀を ひと振り 用意してください」男はますます元気になり、よく食べた。これを見た主人も、里のものも喜んだ。

◎当日、沐浴して、衣裳を着、髪を整え山の中の祠に向かった。人々が集まり御馳走を前に、飲み食い舞いをした。それが終わると、男を裸にして、まな板の上に寝かせ、玉垣の中に据え、人々は山を下った。男は股の間に刀を挟み込んでいた。やがて扉が開き、人間ほどもある猿がきゃっきゃと騒ぐ。一段と堂々とした奴が次に現れたが、それも猿なので、男は気が楽になった。男は刀を持って猿に迫った。「貴様は神か？」猿はびっくりして倒れ、ほかの猿たちも恐れおののいた。男は猿たちを懲らしめ追っ払った。その後、男は長者になり、人々を手足のように使い、かの妻と睦まじく暮らした。

◎美作国神依獵師謀止生贄語第七：みまさかのくにのかみ れふしの はかりこと によりて いけにえをとどむること

◎前回は飛驒の国、今回は美作の国。＜飛驒は岐阜県の北半分、現在：白川・飛驒・高山・下呂の四市＞ ＜美作の国は岡山県の北部の山間部＞生贄という人身御供の話の舞台は、隠れ里に設定している場合が多い。

◎今昔物語・宇治拾遺物語にほとんど同じ内容で載せられているが、原典は不明。

◎前回とよく似た話です。猿神に“生贄としての人”を差し出さなければならない、その神と称する大猿を退治する話。前回は日本から来た修行僧が、幸せのあまり普通の男に変わって、勇気を出して猿退治。生贄はその家の娘だけれど、丸々太った人間なら、代理でもいいそうだ。今回は、東国からやって来た獵師が、猿なら、イノシシやシカと同様、お手の物だと退治する話。こちらは生娘でないといけないうのだ。

◎美作の国に、中参・高野の二神が鎮座し、それぞれの神体は、猿と蛇です。毎年、お祭には、その国の未婚の娘を差し出さなければならなかった。今年とはある家の十六七の娘を差し出さなければならなかった。親子は残り少ない日を思い、嘆き悲しんでいた。

東国からやって来た犬山という男、犬を使って猪や鹿を仕留める勇猛で物おじしない獵師であった。

たまたま獵師が、生贄の家に行き、隙間から覗くと、真に美しく、色白、髪は長く、とても田舎娘とは思えぬ上品さ、そんな娘が髪振り乱して泣くのを垣間見た。

男は、親に言った。「実に情けない親だ 黙ってされるままにしているとは・・・」「どうせ死ぬなら 娘さんを下さらぬか その代わり私が死にましよう」親は娘がどうせ死ぬのならと、この東国人に娘を娶わせた。東国人は娘を妻として暮らしているうちに、離れがたくなっていった。

男は、飼いならした犬に猿にとびかかるように訓練し、刀を研いだ。そして、妻に言った。「私は お前様の見代わりに 私が死ぬつもりです」

◎さて、当日、神主をはじめ多くの人が娘を迎えにやって来た。男は娘が長櫃に入ったように見せかけ、娘と入れ替わり、二匹の犬と長櫃に隠れた。

長櫃に入った生贄を、鉾・榊・鈴・鏡を持ったものが大声で先払いして、お社に持って行き、祝詞を唱えながら玉垣の扉を開き、長櫃の紐を解いて宮司たちは外に下がった。

男が隙間から覗くと、身の丈七八尺の、歯は白く顔と尻の赤い猿が上座に、左右に百匹ほどの猿が、ぎゃあぎゃあ叫んでいる。まな板の上には、大きな刀、酢塩、酒塩などの調味料が備えてある。まるで人が鹿を料理して食べる時のようだ。

大猿が長櫃を開ける、ほかの猿も一緒になって開けようとする。男はやにわに立ち上がり、犬に、「食いつけ」とけしかけると、犬は大猿を食い倒してしまった。男は氷のような刀を大猿の首にさしあてると、大猿は涙を流す。

ひとりの神主に神がのり移り、「未来永劫生贄は求めません この男に危害は加えません 生贄の娘や親を罰しません どうか我が身を許して」

男は、大猿を許して山に放ち、家に帰って女と末永く夫婦になって暮らした。

◎生贄御社（おほむやしる）ニ将参（いてまいり）テ、祝申（のつとまうし）テ瑞籬（みずかき）ノ戸ヲ開テ、此長櫃結（ゆい）タル緒ヲ切りテ、指入（さしいれ）テ去ヌ。瑞籬（みずかき）ノ戸ヲ閉テ、宮司等外ニ着並（つきなみ）テ居タリ。男長櫃ヲ塵許（ちりばかり）クジリ開テ、此長櫃結タル緒ヲ切テ見レバ、長七八尺許ナル猿、横座ニ有リ。歯ハ白シテ、顔ト尻トハ赤シ。次々ノ左右ニ猿百許居並テ、面ヲ赤クク成テ、眉ハヲ上テ、叫ビノシル。前ニ俎（まないた）ニ大ナル刀置タリ。酢塩、酒塩ナド皆居（す）ヘタリ。人ノ鹿ナドヲ食ンズル様也。